

変わる常識

藤垣 嘉秀*

「常識とは、18歳までに身に付けた偏見のコレクションである」とアルベルト・アインシュタインが言っている。常識と固く信じていたものが、一生のうちに変わりうる高度情報時代である。医療人は個々人の常識ではなく、柔軟に今ある最善の医療を提供することを心がける必要がある。近年は情報量の多さゆえに、標準化された医療の提供を保証するガイドラインが出されているが、そこに至った道筋の理解に追いつかず、常識的な医療と信じて実践している感がある。少しは偏見をもち続けたほうがよいかもしれない。

患者情報や検査値を当てはめ推奨診療を実施するのなら人工知能 (AI) がよいだろう。しかし、AI の判断の根底は、先人が積み上げた実績によるものであり、常識が覆るのもその成果である。透析の分野では、人類が生み出した透析アミロイドーシス、被嚢性腹膜硬化症や CKD-MBD は、病態の解明が進み、その予防が新たな常識となっている。試行錯誤が常識であった研究方法も AI 自らが方向性を導き出すことが常識になるのであろうか。

医局体制の様変わりはずで常識になったが、専攻医数のシーリングによる入局人数制限まで始まり、地域での医師数をコントロールすることが常識となっていく。良い医師を育てる思いは変わらなくとも、その仕組みや方法が大きく変容してきている。

一方で、患者に寄り添う心は変わらないはずである。2年

* 帝京大学医学部内科学講座・腎臓内科

目の研修先の内科部長に「内科とはどんな科だと思うか」と聞かれた。「診断が最重要、そして最適な治療をすること」と答えた。「場合によっては、いかに納得して死んでもらう科だよ」と言われた。5度目の年男となり今はその言葉に大きな違和感はないが、当時の死生観はもはや当てはまらないかもしれない。6度目の年男になるときが健康寿命となるが、そのときの死生観はなかなか想像できない。

入局時の教授は、医局員に「君の親にその検査や治療をやってもらいたいかね」としばしば聞いた。わが子が腎不全なら自分の腎臓を提供したい。でも、自分が腎不全になったら移植は望まないと思う。最善の治療法の提案はAIがもっとも優れているかもしれない。しかし、各人の心の常識はAIでははかれない。研修医1年目に60代後半の女性に対して、当時はその年齢ゆえに透析導入の有無を指導医と悩んだことが思い出される。維持血液透析の開始と継続に関する意思決定といった生命倫理や心の内まで、AIが関与することが常識となる時代が来るのだろうか。